



# 願いごと

看護師さんは、泣かないものだと思っていた。毎日、たくさんの命のそばにいるから、人の生死にも慣れてきているだろう、と。

夏の気配がする7月、胆石の摘出手術をするために入院することになった。

当時の私は仕事の多忙さに追われ、正直、手術のことよりも、山積みの仕事に一刻も早く取り掛かりたい気持ちでいっぱいだった。個室での入院を希望したが、病棟の個室は空きがなかったため、無理を言っただけで病棟の個室を手配してもらおうことに。手術後は痛みもあったものの、すぐに仕事に取り掛かる日々が続いた。

夜勤の巡回にいられた看護師さんは皆、私を心配してくれたが、正直それほどではなかったのだ。やがて、仕事が一段落したある日の午後、看護

師さんの一人が、「フロアで『七夕の会』をやるので来ませんか?」と、誘ってくれた。

そうか、きょうは七夕なのか。なぜか分からないが、うなずいてしまった。

後悔しながらも出向いたフロアと呼ばれる場所には、初めて見る同じ病棟の患者さんがたくさんいた。点滴がつながっていたり、ベッドごと移動して参加している人までいたのには驚いた。

「それでは、皆さん各自で願いごとを書きましょう」

看護師さんの言葉に、配られた紙にそれぞれ願いごとを書く。ふと、横を見ると看護師さんがササを見上げてにっこり笑っていた。すぐくうれしそうなその横顔に、不思議な気持ちが出たのを覚えている。私と目が合うと、

看護師さんは照れたように口を開いた。

「この短冊、この間まで入院されていた方が書かれたものなんです」

そう言った彼女の目から、一瞬で涙が頬にこぼれ落ちた。すぐにごまかすように笑うと、ほかの患者さんのそばへ行って書く手伝いを始める。

不思議に思っ、その願いごとに目を向けた。

「もう少しで、妻に会えるのがうれしい」

震える文字で書かれたその願いごとを、私はいつまでも見ていた。

〈静岡県〉山本 潤 40歳  
やまもと じゅん